



とぎのこえ Good News for Japan

もう、これまでと同じではない

平成二十五年三月一日発行
昭和二十二年一月二十四日(第三種郵便物認可)

明治二十八年創刊 毎月一日・十五日発行

ルカによる福音書 24章 13～32節 要約

イエスの二人の弟子が、エルサレムから30キロほど離れたエマオという村に向かっていた。彼らは十字架につけられたイエスについて、悲しみと混乱の中で話し合っていた。そこへイエスご自身が近づいて、何を話しているのかを尋ねた。彼らは、目が遮られていて、それがイエスだとはわからなかった。二人のうちクレオパという弟子が、イエスがユダヤの祭司長や議員たちに捕まえられ、死刑の宣告を受け、十字架につけられたこと。しかし、三日目のきょう、女性たちが墓に行ってみるとイエスの体がない。天使が彼女たちに「イエスは生きておられる」と告げたことを話した。そこでイエスは、長い道のりを二人と一緒に歩きながら、聖書全体にわたってご自分について書かれていることを説明された。やがて、二人の弟子の心の目が開かれ、それが復活したイエスであることがわかった。



大將 リンダ・ボンド

数年前のことです。イースターの日、救世軍のある小隊(教会にあたる)の日曜礼拝に出席しました。説教者が話し始めましたが、それはいつもの説教とは違っていました。この経験豊かな説教者にしては、あまりに単純な説教でした。わたしは、この説教者の母国語が英語でないから、英語を話す会衆の前に用心深くして、込み入った神学用語を避けたんだろう、と思いました。それほど、彼はイエス様の物語を単純に語ったのです。それは、決して説教者大賞を取るような説教ではありませんでしたが、わたしの心は強く揺さぶられました。涙が流れました。

この説教は、忘れられないものとなりました。

このようなことは、説教だけでなく、キリスト教音楽にもあてはまるでしょう。救世軍も他のキリスト教会と同じように、信じていることを喜んで歌にしてみました。イエス様についての物語が音楽の形をとる時、それは、わたしたちの記憶にしっかりと刻み込まれます。歌う度に、いつも、いつも、繰り返して思い出すのです。イエス様の生涯を、イエス様の死を、イエス様の復活を、そして、今日それが与えてくれる意味のすべてを。

今、心にイースターの歌の一節が浮かんでいます。

「重荷に押しつぶされただひとり歩むとき
イエスご自身が近づき

共に歩いてくださった」これはルカによる福音書二四章にある記事を描いた歌ですが、今なお、わたしたちに強く語りかける何かがそこにあります。

二人の弟子が、イエス様が十字架上で死なれた後、失意の中で故郷に向かって歩いていました。残酷な十字架刑を目の当たりにしたら、人の心は壊れてしまうでしょう。しかも、十字架

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。
一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

につけられたのが最愛の人だったなら? 何の罪もないのに? 罪がないだけでなく、一つも欠け目がなく、完全な愛の人なのにな? これほど残酷な光景に、だれが耐えられるでしょうか。二人の弟子の悲しみは、イエス様を救い主として、世界の希望として信じていたことで、増幅されました。長年待ち続けていたその光が、消えてしまいました。すべてが暗闇と絶望と化してしまつたのです。彼らは、うちのめされ、押しつぶされ、何も見えなくなつてしまいました。

今、この文を読んでいる多くの方々にとつて、この物語は理屈に合わないように思えるかもしれません。神様は、その独り子イエス様をくださるほどわたしたちを愛してくださいました。イエス様は、赤ん坊になつて、飼葉おけの中に生まれてくださいました。生きた模範を示し、病気をいやし、説教し、奇跡をおこなわれました。そして、死なれました。犯罪人のよう

に死刑となつて。イエス様が死んでくださったために、わたしたちの罪は赦され、完全な自由、完全な命を得られるようになりました。

そして最も素晴らしいことは、イエス様が死からよみがえつて、肉体をもつて、再び弟子たちに現れた、という点でしょう。幻ではなく、本物の、生きた姿をとつて! どうか、この物語を空想の作り話として片づけないでください。今、この時、これを本当のこととして受け止めてほしいのです。

ルカによる福音書二四章によれば、復活したイエス様―世界の救い主は、心が壊れた二人の弟子のために、時間をとつて、わびしい田舎の道を一緒に歩いてくださいました。それは、弟子の目を開くため、生きる希望をもう一度与えるためでした。同じイエス様が、あらゆる時代を通じて生きておられるのです。イエス様はきょう、あなたの人生の道を、あなたと一緒に歩いてくださいます。そして、あなたの目が開かれ、イエス様を見る

私は、現在、東京・調布市つつじヶ丘に住んでおります。そして、近くにあるつつじヶ丘キリスト教会に所属し、神様を中心とした生活をしております。

キリスト教との接点は今から三十年前、バイオリンの娘によってもたらされました。娘は音大を出てフランスに留学し、そこでイエス・キリストを信じました。その時は、親に相談もなくクリスチャンになっ

妻の死を通して信仰へ

にながわ 蜷川 作男



た、とひと悶着ありました。信仰は個人の自由という事で決着しました。娘は浜田山キリスト教会の会員となり、折にふれて私と妻に

「イエス様を信じなさい」と勧めるようになりました。しかし、私たちは取り合おうともしませんでした。私は音楽が好きで、若い時からパッパのマイ受難曲などを愛聴し、聖書物語やキリスト受難に関する本を読んでいた。また、妻も結婚前、日曜学校の教師を頼まれ、教会に通っていま

したが、結核の発病で奉仕をやめ、以来、教会から遠ざかっていました。二人とも決してキリスト教に無関心というわけではなかったのですが……。

そんな私が信仰に目覚めたのは、妻の死という大きな衝撃によってです。妻は結婚後も療養を繰り返して、右肺を切除して奇跡的に命を取り止めました。しかし、年を重ねるにつれて肺機能障害に苦しむようになり、とうとう在宅酸素の生活を余儀なくされました。

一九九五年の四月、妻は呼吸不全・心不全で入院し、医師から、人工呼吸器をつけないと生命の保証はないと宣告されました。いったん人工呼吸を始めると自力呼吸に復するのは困難、と言われていたので、五十年近く妻の病氣と付き合ってきた私も、今度ばかりは危ないと、一挙に不安のどん底に突き落とされました。折悪しく、娘はヨーロッパへ演奏旅行に出かけたばかり。私は何に祈ればよいのかわからず、読書にも音楽にも慰められず、不安は増すばかりでした。集中治療室から個室へ移された妻は、人工呼吸器の



娘の留学出発の朝、家族 3 人で

ため声を出せず、また筆談する力もありません。コミュニケーションは非常に困難になりました。妻との間の深淵の前に、自分の無力さを感じ知らされました。信仰をもたない私は妻を慰めるすべもなく、ただ、希望をもつように、と言うよりほかにありませんでした。帰国した娘は、見舞いの度に聖書の言葉

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネの福音書 3 章 16 節 新改訳聖書)

を繰り返して妻に語り、イエス様を信じなさい、と説いていました。いつの間にか私も腫れ上がった妻の足をさすりながら、その御言葉を繰り返していました。そ

(前ページより続く) ことができるように、イエス様の声を聞くことができると、そして、あなたの心にイエス様を迎えることができるように、と願っておられるのです。

先ほどの歌に「重荷に押しつぶされただひとり歩むとき」とありましたが、これが、あなたの今の姿かもしれません。「孤独」とは数の問題ではありません。ひとりぼっちだから孤独なのでしょう。大勢の中において、なお「孤独」を感じるーわたしにもあなたにも、そういう経験があるはず。その孤独・空しさは、世界中のどんなものをもつても、けつして埋めることができせん。

肩にのしかかる重圧、負わなければならない責任のために、幸せそうに笑っている人々から、自分ひとりだけが切り離されていると感じることがあります。また、病気が、借金が、家族の悩みが、酒や薬物が、失敗が、さらには、他人からダメだと言われたことが、自分の夢を壊してしまうのかもしれない。このような人生や人々によって、わたしたちは惑わされている、と感じてしまうのです。皆さん、イースターは、人生にかかわることです。それによって悲劇の人生になるか、勝利の人生になるか、ということ。あなたは、失望して生きる、という道を選ぶ必要はありません。イエス様を知るためには、あなたに神学者になる必要はないのです。イエス様の物語をあなたの物語にしてください。あの歌にあるように、「イエスご自身が近づき共歩いて」

して、心が休まるのを覚えました。妻の容体は循環器に障害が生じてから急速に悪化しました。七月二日、その日、娘の属する教会で洗礼式があり、娘が病院に駆けつけた時、医師から、血圧が不安定でいつ容体が急変するかわからない、と宣告されました。妻の顔は腫れ、目は水滴に覆われ、全身がむくみ、呼吸は苦しうでした。が、それでも意識はしっかりとっていました。妻は死期を悟っていたようです。娘は母の手を握り、聖書のヨハネの福音書一章二五節「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのである。』」(新改訳聖書)の御言葉を伝え、

「イエス様を信じるなら、手をしっかりと握って」と必死に呼びかけました。妻はその切なる励ましに、ついに、しっかりと応えたのです。この日の面会が、今生の別れでした。妻は翌日、容体が急変し、

天に召されました。娘は、「ママはイエス様を信じて召天したのだから、葬儀は教会でやってほしい」と言い、私は同意しました。教会で納棺された妻の顔を見て、そのあまりの変容に妄然としました。病苦の影は全く消え、花に囲まれた妻は浄化され、若さと美と平安に満ち溢れていました。私はこの奇跡的な変容に圧倒されるとともに、このような御業をなさる方の存在をひしひしと感じ、心身に震えました。そして、「わたし(イエス)を信じる者は、死んでも生きる」の御言葉が心によみがえりました。

教会堂を得ました。十七人から始めましたが、現在は、毎週、三十五人ぐらいの人が集い、神様を礼拝し、交わりをもっています。私は今年の九月に満八十六歳となります。現在は、教会でもたれる様々な集会に出席してお恵みをいただくとともに、神様をほめたたえるワシントンソングを歌う会にも参加して、心から神様を賛美しています。神の家族と共に歩む日々は幸いです。聖書の詩篇に、

「私たちの齢は七十年、健やかであつても八十年。……それゆえ、私たちに、自分の日を正しく数えることを教えてください」(詩篇 90 篇 10、12 節 新改訳聖書)

とあります。私は今、自分の余生を、地元の方々にキリストの福音を伝えるのに役立てたい、と心から願っております。

(日本福音キリスト教会連合、つつじヶ丘キリスト教会所属)



「天の父よ、主よ」と叫び、賛美していました。後に、「悔い改める」という言葉がギリシャ語では「回」であることを知りまし

人生の多くを病苦と闘い、そのつらかった妻の人生を神様が憐れまれ、死の前夜悔い改めの時をお与えくださり、み恵みにより地上での最後の時を美しく装ってくださったものと思ひ、感謝しました。この時、私の心の奥で何かが大きく回るのを感じました。聖書を知らない、祈りも知らない私が、

「天の父よ、主よ」と叫び、賛美していました。後に、「悔い改める」という言葉がギリシャ語では「回」であることを知りまし



娘・いづみと

イースター(復活祭) と言います。罪の結果である「死」にイエス・キリストが勝利されたことを祝う、特別な日曜日です。キリスト教会では、この日を、クリスマス(イエス・キリストの誕生を祝う日)に勝るとも劣らない重要な日として、喜び、迎えます。イエス・キリストを信じる人はこの復活の命にあずかり(永遠に続く新しい命をいただき、喜びの人生を送ることができるとです。

この日、教会では、会堂の中を春の花で飾ったり、ゆで卵を彩色して礼拝を終えた後、集った人々に配ったりして、お祝いをします。日曜学校では、子どもたちがエッグハント(卵探し)やエッグロール(坂など傾斜のついた所で卵の殻を割らないよう転がすゲーム)などをして、楽しむこともあります。

*卵は、死んだような固い殻の中からヒヨコが生まれることから、イエスの復活と結びつけられました。

このイースターは移動祭日で、春分の日後の最初の満月のすぐ後にくる日曜日となっています。今年、三月三十一日がイースター



です。ぜひ、お近くの教会の礼拝に出かけてみてください。

クリトリ
ご住所
ご氏名
私の近くの救世軍を紹介してください。
キリスト教についてもつと知りたいたいです。
「ときこえ」の購読を申し込みます。

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の救世軍にお送りください。

救世軍とは

The Salvation Army

国際的な組織のキリスト教会(プロテスタント)で、世界百二十六の国と地域で働きを進めています。



一八六五年、イギリスの牧師ウィリアム・ブースが、東ロンドンの貧しい人々、虐げられている人々に神の愛を届けようと伝道を始めました。やがて、人々の一番必要としているものを提供しないで神の愛を伝えることはできないと、物心両面からの救いをめざすようになり、医療や社会福祉の働きが起こされてきました。そして、その時々の人々のニーズに迅速に対応するため、軍隊流の組織を取り入れ、アルコール依存症者の回復支援をおこなっている団体として、信

徒もアルコール抜きのライフスタイルを採りました。

日本での働きは一八九五(明治28年)に始まりました。

廃娼運動や失業者対策を推し進め、結核療養所や婦人保護施設、児童養護施設の設立などに力を尽くしました。また、キリスト教、聖書の神をわかりやすく伝え、多くの人々が真の神を信じるようになりました。

現在は、伝道の拠点である四十六の小隊(教会にあたる)と十の分隊(伝道所にあたる)、十九の社会福祉施設、二つの病院(ホスピス併設)を通して働きを進めています。

年間を通して、街頭生活者支援や災害被災者支援、様々な社会奉仕活動をおこなっています。これらは、社会鍋募金などを通して献げられたお金を資金としています。

また、世界の救世軍は、それぞれの国ごとにパートナーが定められ、財政的に、また様々な面で祈り合い、支援し合っています。日本の救世軍は、南ア



内戦で避難していた人々が戻り、コミュニティ再生のために支援を始めた救世軍(コンゴ民主共和国)



地域医療に取り組んでいるハリー・ウィリアムズ病院(ボリビア)

国際組織の救世軍は、他の国々においても、様々な災害被災者への支援と共に、内戦などからの復興支援、開発途上国での職業訓練、教育の充実などによる自立支援、HIV/エイズ対策プログラム、トラフィック(人身売買)対策などにも力を尽くしています。

国や地域の状況に応じて必要とされる働きは異なりますが、救世軍のすべての働きは、キリストの愛に基づき、人種や思想を超えて人々に仕えるためのものなのです。

東日本大震災被災者支援活動を継続しています

継続しています

一昨年の東日本大震災では、震災直後から被災地での救援活動を開始するとともに、海外の救世軍も募金活動を開始し、さつそく世界各地から献金が送られてきました。それらの献金が、岩手県大船渡市「おおふなと夢商店街」、宮城県南三陸町「南三陸さんさん商店街」、宮城県女川町「希望の鐘商店街」の早期建設をはじめ、大小様々な救援・支援活動に役立てられました。これまでに、被災地三県でおこなった緊急支援、物資支援、復興支援の総額は、約八億円になります。救世軍は、これからも、被災地の復興のため、変化するニーズを調査しながら、現地の要請に応える支援を続けます。特に人々の精神的なケアの必要を覚えてつ、人々に寄り添う支援を継続していき

ます。



女川漁協・出島(宮城県)へ漁場監視兼救急搬送船を提供



大船渡市の仮設住宅へ年越しそばを届け、交流の時をもつ

3月～4月 救世軍では 克己週間 と呼ぶ 募金活動をおこないます

これは、今から約120年前、救世軍の創立者ウィリアム・ブースが信徒に「それぞれ1週間だけ何かを節約して(克己して)、そのお金を献げよう」との呼びかけで始まりました。目的はヨーロッパ各地に働きを広げるためでした。この精神は、今日まで引き継がれ、毎年、世界の様々な国でおこなわれている人々のニーズを満たすための働きや災害被災者の支援活動などを進めるため、募金がおこなわれています。

この時期、信徒は率先して献金するとともに、救世軍の制服を着た伝道者や信徒が戸別訪問をし、趣旨を説明して献金を募ります。

この趣旨に賛同して下さる方は、次の方法でも献金が可能です。

- 郵便振替
00180-5-4400
加入者名 救世軍本営
 - 現金書留
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町2-17
救世軍本営
 - インターネット
救世軍ホームページ
<http://www.salvationarmy.or.jp>
- *いずれの場合も、通信欄に「克己週間募金」とお書きください。
- お問い合わせは、
救世軍本営 伝道事業部まで
TEL 03-3237-0881

(取扱支部)

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

発行日及び定価

- 発行日 毎月一日・十五日
- 定価 一日号一部五〇円(千六〇円) 十五日号一部六〇円(千六〇円) クリスマス特集号(十二月一日号) 一部一〇〇円(千六八〇円) 一年分(二七〇円)送料七二八円 振替・〇〇一八〇五四四〇〇

印刷兼 救世軍 代表者 勝地次郎 齋藤恵子

編集人 齋藤恵子

電話 東京(03)三三七〇八八一

発行所 救世軍本営

印刷所 図書印刷株式会社

創立者 ウィリアム・ブース 大将 リンダ・ボンド(万国本営 英国ロンドン) 日本司令官 勝地次郎(救世軍本営 東京都千代田区) <http://www.salvationarmy.or.jp>

(この欄に通信文を書くと第三種扱いになりません)